

小児期の脳挫傷患者の特徴  
— 成人例との比較 —

富山県高次脳機能障害支援センター

1. 目的

成人期に障害を受けた脳挫傷患者と比べ、成人前、とりわけ幼児期に受傷した脳挫傷では、発育に伴う様々な問題により障害が増幅する可能性が予想されるが、詳細な検討がなされていない。成人期前に受傷した脳挫傷患者の特徴を明らかにすることを目的に、成人期受傷患者と比較した。

2. 対象および方法

2008年1月～2009年3月までに富山県高次脳機能障害支援センターを受診した「脳挫傷」患者43名（男37名 女6名）を対象とした。全例、前医で脳挫傷と診断されている。

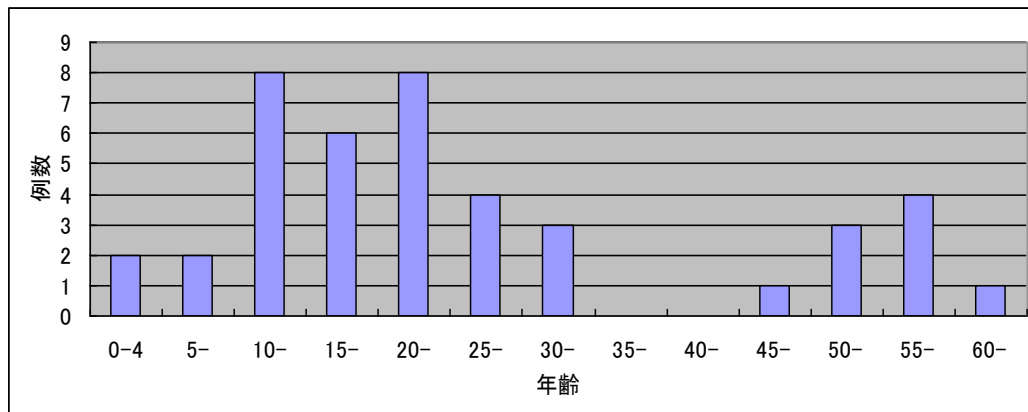
有意差検定には t 検定を使用した。

3. 結果

(1) 症例のプロフィール

	18歳未満	18歳以上
例数	16例	27例
性別	男 12例 女 4例	男 25例 女 2例
受傷年齢（平均）	10.9歳	34.3歳
相談時年齢（平均）	22.9歳	40.0歳
相談までの年数(平均)	12.0年	5.7年

(2) 受傷時年齢分布



10歳から24歳までのピークと50歳台の二つのピークがある。

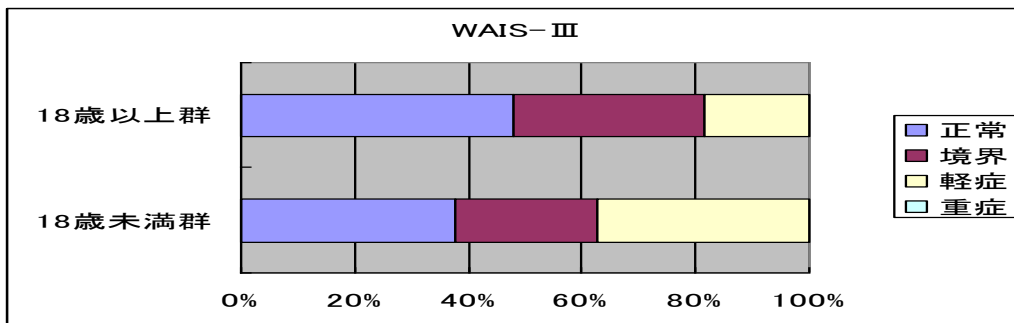
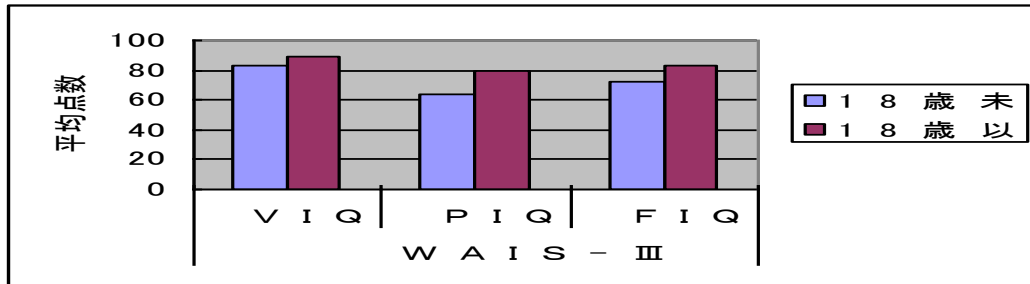
(3) 受傷原因

	18歳未満	18歳以上
交通事故	15例	19例
転落・転倒	0例	6例
スポーツ外傷	1例	1例
けんか		1例

(4) 検査結果

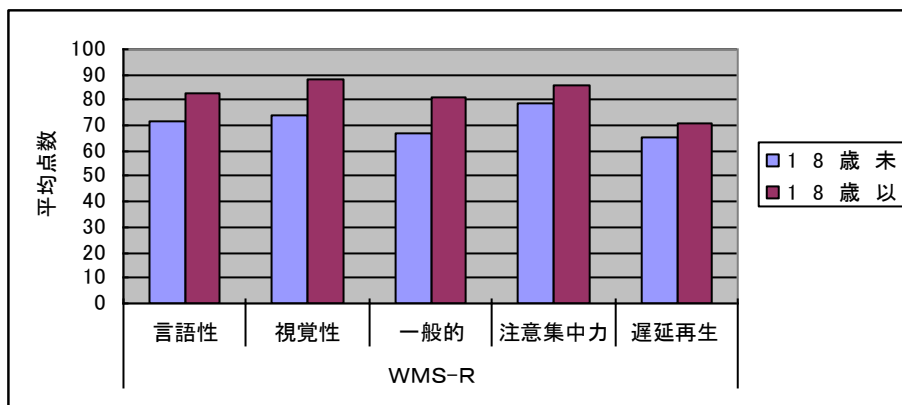
		18歳未満		18歳以上		t検定
WAIS-III	VIQ	82.6		89.4		P<0.10
	PIQ	64.1		79.8		P<0.01
	FIQ	71.7		83.3		P<0.05
WMS-R	言語性	N=15	71.8	N=24	82.5	P<0.05
	視覚性		74.2		87.8	P<0.01
	一般的		67.3		81.3	P<0.01
	注意集中力		78.6		86.1	NS
	遅延再生		65.5		71.2	NS
TMT-A		N=15	162.9	N=20	140.9	NS
TMT-B			204.4		203.4	NS
BADS		N=15	15.7	N=12	17.5	P<0.10
てんかんの合併		5/16名 (31.3%)		2/27名 (11.8%)		

①WAIS-III



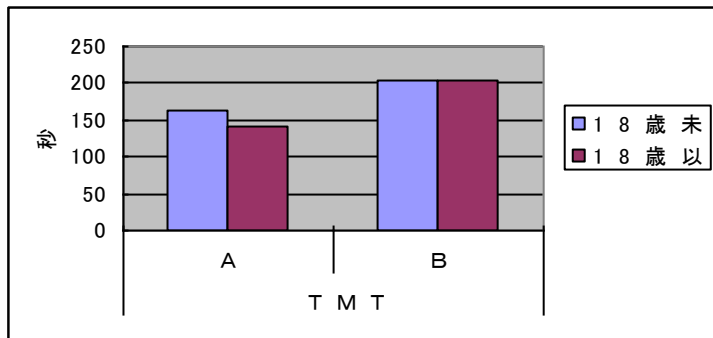
18歳未満群が明らかに低値を示したが、動作性が言語性より低いパターンは両群とも同じであった。

②WMS-R



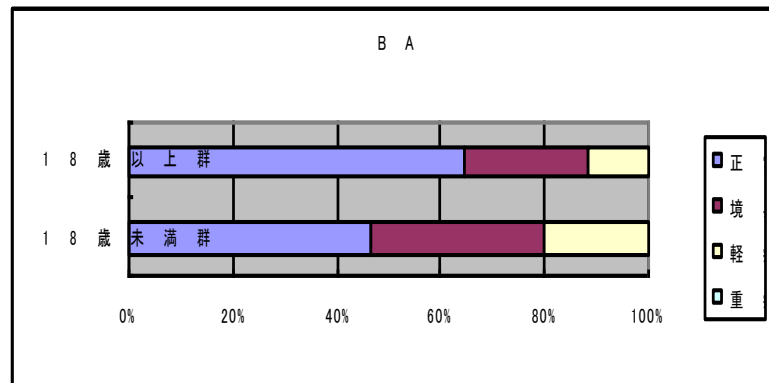
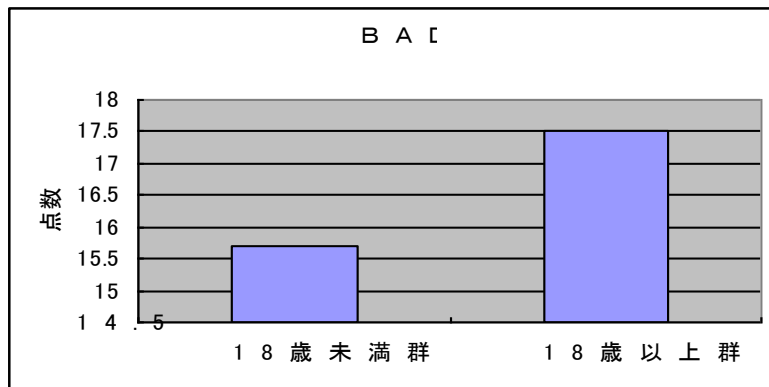
言語性、視覚性、一般的記憶において有意に 18 歳未満群が低かったが、全体の記憶障害のパターンには差はないようだ。

③TMT



注意力障害では、両群に特に差は認めなかった。

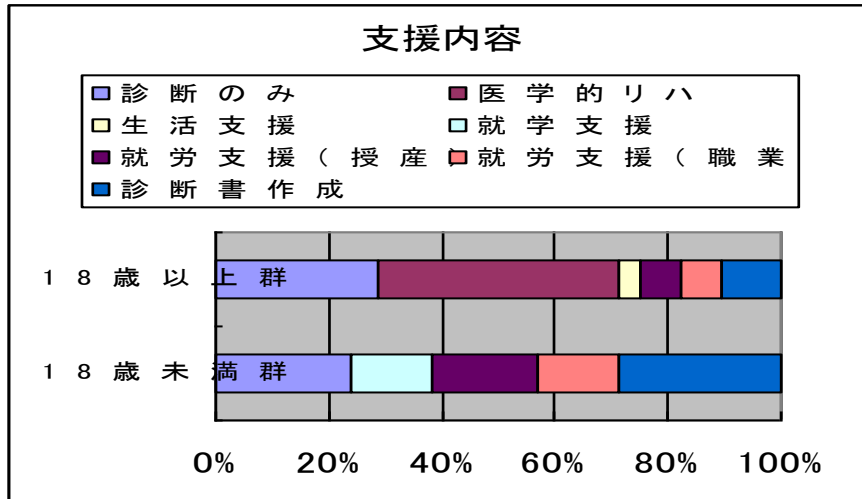
④BADS



18歳未満群に遂行機能障害が多かった。

(5) 当センターの対応

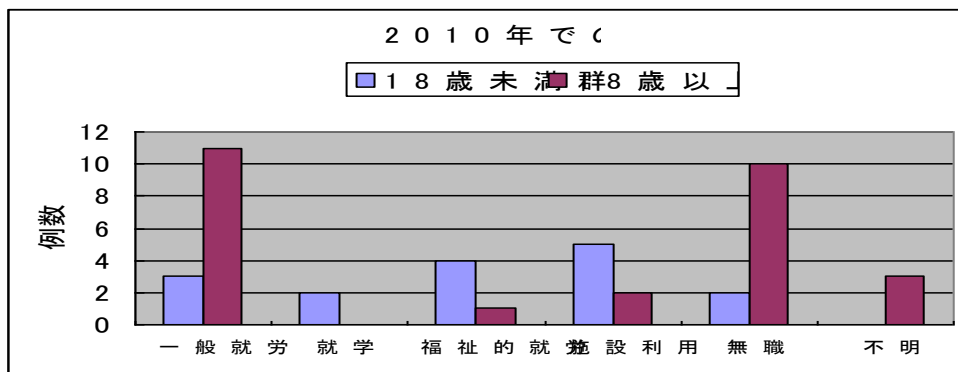
	18歳未満群	18歳以上群
診断のみ	5例	8例
医学的リハ	0	12
生活支援	0	1
就学支援	3	0
就労支援 (授産)	4	2
就労支援 (職業センター)	3	2
診断書作成	6	3



18歳未満群では就学・就労支援を行ったものが多く、一方18歳以上群では医学的リハビリテーションを勧めたものが多かった。

(6) 転帰(2010年1月現在)

	18歳未満群	18歳以上群
一般就労	3例 (18.8%)	11例 (44%)
就学	2 (12.5%)	0(0%)
福祉的就労	4 (25%)	1 (4.2%)
施設利用	5 (31.3%)	2 (8.3%)
無職	2 (12.5%)	10 (41.7%)
不明	0	3 (--)

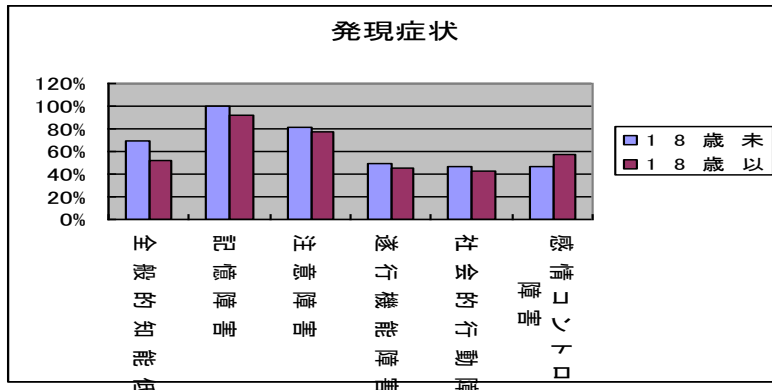


18歳未満群では福祉的就労や施設利用にとどまるものが多いが、18歳以上群では一般就労が多かったが、就労せず自宅で過ごす人も多かった。

4. 考察：18歳未満に受傷した症例の問題点

(1)高次脳機能障害の症状について

	18歳未満群	18歳以上群
全般的知能低下	68.8%	51.9%
記憶障害	100%	92.6%
注意障害	81.3%	76.9%
遂行機能障害	50%	45.5%
社会的行動障害	46.7%	42.3%
感情コントロール障害	46.7%	57.7%



高次脳機能障害に関する症状の発現率には発症年齢は無関係と思われる。しかし、高次脳機能障害の検査結果から全体的な知的水準の低下、記憶障害、遂行機能障害は18歳未満に受傷した患者のほうが重度であった。しかし、受傷から受診（検査施行）までの期間が長いこと、患者の選択そのものにバイアスがかかっていることから、若年齢者が重度と断定することはできない。

(2) 支援について

18歳未満群では就学・就労支援を行ったものが多く、一方18歳以上群では医学的リハビリテーションを勧めたものが多かった。これは、18歳以上群での当センターまでの受診までの期間が短く、作業療法などの医学的リハビリテーションの効果が期待できる人が多かったことによると思われる。

18歳未満群では福祉的就労や施設利用にとどまるものが多かった。症状が重度であることと、就労前に生活指導が必要な人が少なからずおり、すぐに一般就労への支援とはならないことが多いと思われる。また、18歳未満群では受診までに長いこともあって、職場を何ヶ所も転々とした例が18歳以上群に比べ多かった。このことは、早期に支援センターが介入し、生活指導も含めた支援プログラムを行う必要性を示唆するものと思われる。

18歳以上群では一般就労が多かったが、就労せず自宅で過ごす人も多かった。一般就労が多かったのは症状が比較的軽度であるケースが多かったせいもあるが、早期にわれわれが介入し、職場や家族の理解を得られたために復職あるいは新規就労が多くあったためと思われる。無職で過ごす多くは高齢のケースであり、今後、これらの人たちの実態を明らかにして、高齢者への対応を検討していきたい。

D. 健康危険情報

特になし

E. 研究発表

特になし